

①企業会計基礎講座(必須・一部免除)(第1 quarter)

記帳、日常経理処理、簿記から会計情報を用いた企業経営戦略に至るまで、会計情報の活用に関わる基礎的な知識を養成する講座。たんなる用語の理解よりも、会計情報の活用が企業経営に何をもたらすのか、会計基準の動態、国際会計など、今日的な企業経営における会計情報の有機的応用に重点を置くものである。加えて、数値データによって事象を的確に判断する数値能力の向上も重要な目的とする。データの量換算、量比較、推論、比率換算、時系列変化、傾向値、妥当性判断、2項以上のパラメータの相互関係等々の数値能力の向上をネライとしている。

提供する情報は多岐にわたるが、既存の知識水準の如何によって具体的な受講内容を柔軟に変えていく。また、日商簿記検定2級合格者については受講を免除する。

配賦するテキストにはチェック欄を設け、自らの知識・能力等の進捗状況を自ら管理し、弱点を克服するという意識の定着をはかっていきたい。1週間に1度程のインターバルで学習状況をチェックするための課題問題を送付する。また、随時、メールによる質疑・応答も実施する。

期間	2ヶ月
密度	自宅学習+1週に1回の確認テスト
場所	自宅学習+メールでの質疑+付加データ送付
義務	計画的自己学習+テスト解答
評価	課題提出状況で総合的に評価

②日商簿記 3 級講座(必須・既合格者は免除)(第 1 quarter)

日商簿記 3 級に合格するための講座。最初に、試験概要、出題範囲、出題傾向、テキスト、過去問集等を配賦し、受講者の既学習水準、実務経験等を勘案して学習スケジュールを決定する。初期自己学習(通常は約 1 週間)後、出題傾向を考慮した演習問題(全 15 回)を配付し、期日内での解答を求める。解答後、正答と解法、関連解説等のドキュメントを個別に配賦する。受講者は自己採点を行い、理解されていない簿記処理領域の再学習を行う。全 15 回の演習終了後、本試験の傾向を考慮した模擬試験を 3 回実施し、合格可能性を診断する。

この講座も日商簿記検定 3 級合格者、1・2 級合格者については受講を免除する。受講開始日については、本試験日程を考慮して最良のタイミングでの受講開始日を決定する。日商簿記検定受験料については、受講者の負担とする。

加えて、テキストを熟読しても理解できない受講者のために、研修会場にて丁寧な簿記解説を収録した DVD 講義も随時提供する(知的所有権保護の観点から貸出は不可)。また、電車や移動中にも学習できるよう、音声による講義ファイルも提供する。メール等の質疑ではどうしても理解できない場合には、HuSEEC の専門担当者が直接に指導する場合もある。

期間	3 ヶ月
密度	テキスト講読(1 週間)+演習(全 15 回)+答練 3 回)
場所	自宅学習+演習問題解答+弱点チェック
義務	自己学習+演習問題解答提出+復習+答練解答
評価	実際の受験での合否・得点

③日商簿記 2 級講座(必須・既合格者は免除)(第 2 quarter～第 3 quarter)

日商簿記 2 級に合格するための講座。最初に、試験概要、出題範囲、出題傾向、テキスト、過去問集等を配賦し、受講者の既学習水準、実務経験等を勘案して学習スケジュールを決定する。初期自己学習(通常は約 2 週間)後、出題傾向を考慮した演習問題を配付し、期日内での解答を求める。解答後、正答と解法、関連解説等のドキュメントを個別に配賦する。受講者は自己採点を行い、理解されていない簿記処理領域の再学習を行う。

この講座も日商簿記検定 1・2 級合格者については受講を免除する。受講開始日については、本試験日程を考慮して最良のタイミングでの受講開始日を決定する。

この 2 級講座の場合、演習は商業簿記が 31 回、工業簿記が 15 回実施される。正答とともに送付される解説は、全 1,500 ページにも達する膨大な量になるが、これらを理解することでほぼ合格圏内の実力を確保する。解説には、数多くの練習問題が附属しており、受験までにできるだけ数多くの問題を解き解釈、計算時間の短縮をはかる。演習問題修了後には、本試験の傾向を考慮した模擬試験を 5 回実施し、合格可能性を判断して本受験日を決定する。なお、日商簿記検定受験料については、受講者の負担とする。

加えて、テキストを熟読しても理解できない受講者のために、研修会場にて丁寧な簿記解説を収録した DVD 講義、音声だけのファイルも随時提供する(知的所有権保護の観点から貸出は不可)。メール等の質疑ではどうしても理解できない場合には、HuSEEC の専門担当者が直接に指導する場合もある。

期間	6 ヶ月
密度	テキスト講読+演習(全 46 回)+答練 5 回)
場所	自宅学習+演習問題解答+弱点チェック
義務	自己学習+演習問題解答提出+復習+答練解答
評価	実際の受験での合否・得点

④量的概念把握強化塾・プログラム化された意思決定論講座(必須)(第2 quarter)

事象を計量的に捉えることは、さまざまなビジネス・シーンにおいて必須ともなっている。これは、計量データだけではなく、カテゴリー・データについても妥当する。もちろん、計量化表現が不可能な事象もあるし、確率論やゲーム理論、マネーゲームに多用された金融工学等に対する批判もあるから、数学万能主義の立場は採用しないが、そうした限界の範囲内で、諸情報を数的に捉えるという習慣づけを行っていく。

まずは、H.A.Simon が提唱した意思決定論(OR や LP ではない論理的意決定論)において、プログラム化された非革新的意思決定のためのシミュレーション解析から予測モデルまでを学ぶ。これらの解析には、微分方程式が多用されているから、微分方程式未履修者や不得意者の場合には、⑨の基礎数学講座を先行チェーン科目とし、それが修了してからこの講座を履修する。

この講座でも、実際のビジネス展開を常に念頭に置く。たとえば、予測モデル学習では、「在庫管理の conflict」を題材として、商品やサービスごとにもっとも適切な安全在庫量設計モデルを実際に構築してみる。こうした実習形式の演習問題をつうじて、企業経営が直面しているさまざまな諸課題に触れてみることも本講座のネライになっている。

他方、SPI2(2013 年度から SPI3)の重要な柱となっている非言語能力検定を構成している問題(推論、場合の数、確率、集合、損益算、速度算、表の読み取り、資料の読み取り、長文読み取り計算、代金の精算、料金の割引、割合の計算、分割払い、装置と回路、物の流れと比率、不等式と領域、年齢算、通過算、整数の推理)も本講座の主要な内容となっているから、SPI2 のスコアが重要な評価基準にもなる。

期間	3ヶ月
密度	自宅学習+メールでの質疑+課題(1週に2回)
場所	自宅学習+課題解答
義務	毎回の課題解答+復習
評価	課題提出状況+課題のスコア+SPI2 非言語テスト

⑤経営分析実習講座(必須)(第3 quarter～第4 quarter)

標準的な経営分析ツールを用いて、実際の諸企業の財務諸表データ(有価証券報告書等)を使って、企業の経営状況、問題点、将来的業績予測、課題発見等を具体的に分析することを通じて、計量化分析の習慣づけを行うとともに、現実の企業経営を対象化し、分析する能力を向上させる。学習の進行状況をにらみながら、会計情報だけでなく、各種調査、アンケート調査等も活用して立体的な分析を試みる。

ダミーのデータは一切使用せず、現実に存在している、あるいは存在していた企業のデータを用いる。また、一般的な経営分析だけではなく、決算報告に隠されていた問題の探求、粉飾の発見、事業の構造的革新、当該企業の将来的可能性、環境経営、社会貢献、事業継承、新分野進出の可能性、長寿性、注目すべき資産、脆弱性、等々について多面的に分析することを通じて、企業のあるべき姿を模索してみる。

同一産業同規模企業間の比較だけではなく、時系列比較分析、国際間比較分析、業績伸張企業・遅滞企業間比較などさまざまなベクトルからの分析を試みる。受講者は、複数のターゲット企業を選択し、経営者の意思決定の評価、異なった事業戦略によるシミュレーションなどを試みて分析報告書を作成する。

また、これまでにないユニークな指標を採用し、それを基準としたランキング表も作成してみる。既存のツールは極力利用せずに、受講者自ら excel 等を用いて分析ツールを作成することを推奨する。

期間	6ヶ月
密度	基礎学習+1週に1回の演習問題解答
場所	自宅学習+メールでの質疑
義務	毎週の演習課題提出
評価	課題提出状況、解答得点等を総合的に評価

⑥統計学基礎講座(必須)(第2 quarter～第4 quarter)

企業経営での応用が期待できる統計手法を具体的に学ぶ講座。この講座でも、教科書的な理解よりも、実際の生きたデータをどのように解釈・理解し、応用的に予測できるかをより重視する。

まずは、母集団と試料、各種統計量、期待値と分散と標準偏差、検定と推定、帰無仮説と対立仮説、第1種の過誤と第2種の過誤(α の法則と β の法則)から学んでいく。とりわけ、統計的仮説の立て方を重視する。つまり、証明したい事や発見したい事を対立仮説にし、その反対を帰無仮説にするわけだが、推定実例をあげた検定の演習を繰り返す。こうした手法が、技術革新の大きな契機となる。続いて、一元配置の実験計画、分散分析表、検定と推定、二元配置実験、区間推定、交互作用、直交配列、分散分析、回帰分析、重回帰分析、主成分分析などに進んでいく。その後、SD法や品質管理などといった具体的手法についても実例データにもとづいて応用可能な水準まで理解を深める。

加えて、この講座でもテキストの一部に英文を用いる。わが国における統計学の水準は世界的にみて高いが、その実際的応用という面では見劣りする点もある。数学という世界共通言語を使うのであるから、その説明もまた英語でという趣旨である。

期間	9ヶ月
密度	1週に1回の実習+自宅学習+メールでの質疑
場所	集合研修と自宅学習+メールでの質疑
義務	毎週の課題提出+実用ソフト作成
評価	課題提出状況、実習、最終課題等を総合的に評価